會員の頁

第24卷第1號　昭和13年1月

所感

會員　伊藤　剛*

太田尾君の論文を讀んで大分岡田道一氏記事（学士會月報 9 月號）に心を打たれた樣子を察した。兎に角該記事で最も奮起を促された內務省土木技術官の 1 人として私はつくづく考へざるを得ないのである。

先達の軍人會館に催された技術立國技術者大會に私は壇上に立つの光榮を有した。私の用意して行つた原稿は當日の然も間際になつて時間の關係上短縮せざるを得なかつた。その時迄有馬農林大臣始め各方面の權威者の血湧き肉踊る熱烈な講演を聞き私も用意して行つた原稿が使へなくなつたのを幸ひもつと徹底した强硬意見を吐く決心をしたのである。所が演壇に立つ間際に至り，又立つてからもどうしても强いことを言ひ得なかつた。幾度か內心もつと强く强くと思ひ乍らも出て來る言葉は歇らかくなつて了ふ。僅かの時間ではあつたが心理的には隨分二つの氣持ちが相爭ひ迷ひつづけたのであつた。どうしてかと云ふに結論から先に云ふと「退け目」を感じたのである。他の方面の技術者は兎に角世界に負けない技術を持つてゐる。不都合千萬な制度の下に置かれてゐ乍らあれだけの仕事をし國運振興に大いに寄與してゐる。例へば醫術にしても世界一の進步した方面を持つてゐる。それにも拘らず衞生狀態が世界で二流國並なのは行政を管掌してゐる事務官が惡いのだ。この事實が餘りにも明白でこれだけの力强い理由を持つてゐればいくらでも强いことが云へる。我々の土木技術の方面では色々な理由があるにしても，まだ大部分は世界一流であるとは云へないと思つてゐる。もしあるならば私としては土木技術者の各位に不明を恥じなければならないのであるが不幸にして，殊に內務省系統の土木技術界に於てはまだ列國に對し劣つてゐる樣に思へる。世界の人が見に來る樣な新しい仕事もなければ世界をリードした理論も出てない樣に思へる。只あるのは模倣のみでは無からうか。實はこの大會が濟んで 1 ケ月位たつてシヤム國バンコック港の競爭設計に於て世界の 23 ケ國を相手に見事覇を唱へたのを知つたのであるがせめて之でも當時わかつてゐたならばと思つた。大會の時には我に誇るべき何物もない樣な氣がしたので甚だしく退け目を感じ制度改革を唱へ技術官に國策遂行の第 1 線に立たしめよと叫ぶ前にもう少し我々の本質的內容を充實しなければならぬと思つたのである。否充實したいのである。この技術者大會又その後の關係者一同の活潑な運動も實は遞信省の電氣方面の技術者が主流となつてゐるのであり，その眞のイニシアチーブをとつたのは或る技術官の局長であると云はれてゐる。この人は何年か前から 10 人の同志と制度改革に强硬意見を唱へ直接運動をしつゞけて來たさうである。最初の運動開始の時 5 人の同志は尖鋭分子として退職せしめられその後もポツポツかけて今殘つてゐる同志はこの局長只 1 人ださうである。遞信當局にしても煙たくて弱つてゐるらしいのであるがこの人が居ないと出來ない仕事がある。余人を以て換へ難い技術をもつてゐる。この人を退けると遞信省が困る許りでなく，國が困るのださうである。海軍が困るのである。國防に弱點が出來るのである。自分の關係する技術にこの樣な人があり，この樣な誇るべき技術が無くては强いことも云へないではないかとつくづく思つたのである。

---

* 內務技師　工学士　內務省土木局第二技術課勤務